



あこがれられ  
たい



アパッチ純情

私にはセンスがない。

小野安二郎の作品を借りて見ても、フェルメール展に足を運んでも、バロウズの詩集を読めども、良さがまるで理解できない。のた打ち回る感動が胸に迫ってこないのだ。

映画鑑賞後に、感動したなあと胡乱な瞳で語る人を見るにつけ、一度でいいからそのような（点同軸を噛みしだく）揺さぶられる感情にあってみたいものだと思っていた。

小学生の頃、国語の授業中、段落ごと順繰りに朗読する。武者小路実篤の友情だった。当時は万事、睡魔が傍らに立ち、またぽつぽつ途切れる文体のリズムが私の瞼を重くする。教師に指され、あたふたすると恥をかくので、印刷された文字を親の敵のように睨んだものだ。どうにか寝ずに休み時間になると、隣の席の女子が溜息をつき国語の教科書を胸に押し当てた。どうやら感動しているらしい。

私は己の小便臭さに辟易した。私ときたら、青年が卓球でわいのわいのはしゃいで楽しそうだからの額面上でしか受け取っていなかった。

大学生になり、レポートをまとめねばならず図書館を訪れたが、どうにも根気が続かない。オーディオルームに寄り古今亭志ん生のCDを借りて、レポートも書かずに聞いていた。黄金餅が面白くIPODにも入れた。

聞いてへらへら笑っているが、何が面白くて笑っているんだか言葉で説明できない。只笑い、人に講釈もたれられずにいた。

なんでもよいから身を裂く感動をというやけっぱちは嫌で、周囲から得心を得るようではなくてはならない。無痛覚者ではなく、ふらり入った映画館で見たダイハードに拳を硬く握る醜態を晒したこともあった。爆発、銃撃、絶対懲悪、を主にするハリウッド映画で温度が上がったなんて体裁が悪いではないか。無感動ではなく、ただ単にセンスが欠落しているだけらしい。

このセンスなる人格をも変貌させる衝撃が、私に撃たれる日がくるのだろうか。

私ときたら、そもそもに自信がない。着ている服も己の琴線に引っかかったというよりは、友人の目が引っかからない目安で選んでいる。男性誌を開き流行に似通った商品を購入すれば、なんとなしに様になった。新しい服を卸す日は他人の目が気になり、友人と会いなにも言われないうまで憂鬱と過ごした。

センスというやつは、生活するに至り局面局面で問われてくる。

例をあげれば、居酒屋で、注文したサラダドレスを数種類の中から選ぶのを一任されれば、眉間に皺を寄せてしまう。友人も別段センスを問うてるわけじゃなし、間髪いれず決めてしまえばいいとはわかっている。しかし、それが難儀だ。注文を取りに来た店員を前に、愛想笑いして、沈黙の数秒が流れ余計気が焦る。一刻の猶予もないと決めた青シソドレスは、友人に青シソかあと不評の模様。ますます焦り中華に変更。店員がオーダーを通しに引っ込んだ後に、所作の醜さを心中で笑われているのではないかと邪推し、人知れず心労する。

ミニシアター系の映画館では、退屈なフランス映画で草原映像が長々と流れ、睡魔が肩を叩く。寝てはこの後の映画談議に遅れをとる、必死に目頭に力を込める。汗をかいた紙コップを落としそうになりながら、終始睡魔と格闘し続け二時間。終わりしなファミレスで少憩をとる。炭酸

で喉を潤しつつ先ほど見た映画を、曖昧な記憶の断片を喋り、後は相槌に力を入れ、お茶を濁す。家に帰り床に就くとき、どっと疲れ溜息として漏れる。

センスがないだけで気苦労が絶えない。

テレビに出演していたオノ・ヨーコを見て得心した。オノ・ヨーコのようにセンスがないのであれば、いっそあるように見せればよいのだと気付いたが、それにはまずセンスのある人物に私を褒めちぎってもらわなければいけない。そんじょそこらの三流センスの主では、それ以上のセンスの持ち主を目くらましできないだろう。しかしそうそう後光差すセンスが服を着て歩く奴なんかそういるはずもない。

それ以前に私はオノ・ヨーコのような人格になりたいのか疑問符がつく。屍の上で踊り狂う人を目指しているのに気を滅入らせた。なによりも人のふんどしで相撲をとって踏ん反りかえってる奴を嫌悪しているのだ。

夜長、浅知恵力尽き、不毛な思案のループで枕に突っ伏す。

一度揺さぶられる感情に会えば、一石二鳥だ。姑息ではあれど、センスの筋道が発見できれば前立腺が枯れるまで続く気苦労から開放される。

## 2

私が、たよりない背を目で追うようになったのは、皮膚が突っ張る乾いた日だった。

八坪ほどの古着屋はアンティーク調で統一されていながら古臭さの感じない店だった。壊れた鳩時計があり、時計は正常に動くが、常に鳩は出ている。お慕い申し上げてる狐目の女は定員で、栗色したストレートに黒縁のだて眼鏡をかけていた。マスカラがレンズに付着しないように、あらかじめレンズを外してある。吊り上った目尻の狐目がコンプレックスであろうことは縁の大きさでいわずもがわかった。

薄くoasisが流れる店内で、会話中彼女の口から梅ガムが匂い、カウンターで焚かれている香の匂いと相成って妙に惹かれた。どうにか食事に誘ったまではよかったが、当日、時間になっても連絡が取れない。唇のひび割れを舐める。ようやく諦めが付き、腰を浮かしたのが長針短針が太陽を指す頃になっていた。

狐目のリクエストが海鮮丼だというので、生魚が苦手なのを隠し、不出来な勉学の合間を縫いリサーチを重ねた。話題性があり安価な店を探し出すのは骨が折れた。

予定した店の難点は、昼過ぎには閉店してしまうので、待ち合わせ時刻がどうしても早くなる。待ち合わせ時刻を告げた時、なにか兆候があったのやもしれない。急いで受信ボックスを開き、メールの文面から探ろうにも、素っ気のないゴシック体ではどうにも難しい。九十九里の店までわざわざ下見に出かけたのに、全くの不毛である。心中で、電車賃返せと狐目を罵った。

睨み付けても一向になしのつぶての携帯を閉じ、ブロンズ製の炒飯のオブジェ前から移動した。

私の地元は、度々夕方ニュースで取り上げられている。六時十四分から一斉に始まるコーナーだ。質屋で行われる喧々諤々の売買風景や商店街の特集だったり、飯時に放送している。

初対面の人にS市在住と言えば、決まって「ああ炒飯の」と大して興味も無さそうに反応され、表面上はにこやかにしているが、気を害することが頻繁にあった。しかし悪いことばかりでは

ない、友好関係を築きたい人には、自己紹介に称して人ったらしに炒飯で有名な、と話題を加えて取っ掛かりを提示したりしている。稀に四国地方のD市に何らかの関係を持つ人に話題を振ってしまい、敵対心を持たれることもあった。そんな時は、えへらえへら締りのない笑みを浮かべやり過ごす。

私は炒飯年間消費量日本一位なんて称号どうでもいい。

S市住人が炒飯に向ける熱量とは大きな隔たりがあった。地元S市にはS炒飯なるご当地料理あり、それが我が町のアイデンティティーと胸を張る者もいる。胸を張る者の大半は、柄の悪いヤンキーか親になった元ヤンだった。

S炒飯の特徴といえば、ミキサーで蕪をペースト状にしたものを、細かく刻んだ海老、葱、鶏肉、と白米を炒めた上にドロリとかける。くそみそ一緒くたの下品な食べ物だった。テレビ効果もあり広く認識されS炒飯を目前にして驚く者は目にしなくなったが、二年前までは緑の不気味な外見に憤慨し、店主の首根っこを掴む人だっていたくらいだ。個人的にはS炒飯よりどこでも食えて味が想像できる炒飯のほうが好みだったが、それを大っぴらに口外すると住人から脱藩侍のように石を投げられそうなので口を噤んでいる。

炒飯年間消費量日本一位。なんともくすんだ称号だ。元祖S炒飯を出しているミンミン飯店では、安価な金メッキのトロフィーを誇らしげ掲げる店主の写真が額に入れられ飾られている。

油まみれで魅力のない称号でも欲しがるといえる人たちがいる。汚い人形に涎を垂らし、大枚叩く人の気が知れないのと同様に、炒飯如き目の色変える奴の気が知れない。D市はS市に対抗意識を燃やし、見た目が真っ赤の激辛炒飯を作り、日夜むしゃむしゃと食らい唇をぷっくり腫らしているという。炒飯年間消費量日本一位の座を虎視眈々と狙っている。誰がリサーチしているんだが知らないが、その差は拮抗してるらしい。

緑色した炒飯に対抗して赤色の付随した炒飯を作った時点で負けていると思うのだからいかなものか。この炒飯チキンレースの行き着く先は考えないようにしている。

講義をすっぽかして色情にうつつを抜かした罰なのか、昼過ぎに手持ち無沙汰になってしまい、北口側のショッピングモールへ足を向けた。

北口の再開発が進み私が小さい頃とはすっかり様変わりしていた。北口には木造モルタル造りが多く、ストリップ場やらソープやら御婦人方が怒り狂う風紀がふんだんにあったが、区画整理で二車線から四車線に道路が拡張したぐらいから序々に木造の建物が姿を消していった。ショッピングモールの誘致が決まると、洒落たパン屋なんかができはじめ、あっという間にすさんだ空気は散った。

下校時に目の当たりにした、黄色い息を吐き目の据わった大人が醸し出す廃頹とした風紀に、小学生の私は場違いな居心地の悪さを感じたものだ。

あまり舗装されていなかった歩道は今では等間隔にポプラ並木になり、その下を洒落た人が服を着た犬を抱いて歩く健全な街になった。前までは野良犬なんかがいて、飼い犬には見られない筋肉の付き方をされていて、恐怖し逃げていた。

五十を超えるテナントが入るショッピングモール一階に構える大型書店で雑誌を立ち読みをし、いくつかストールに目星をつける。書店を出てから携帯のメモに先程記憶したストールの特徴

を打ち込んでいく。もうこの作業は買物する前のルーティーンになっている。

二三店周り雑誌に掲載された物に近いストールを購入した。色合いが少し暗いがこの程度だったら許容範囲内だろう。

店の紙袋が切れていたらしく、ストール一本に見合わない、赤ん坊がまるまる隠れるくらいのおおきな紙袋を持たされた。ショッピングモールの中央に開いた休憩場へ移動し、ベンチに腰掛ける。

親子連れが向かいのベンチに腰掛け、三人で異なるソフトクリームを舐めている。女の子は口の周りをソフトクリームで茶色に汚しつつ、少し離れた所にたたずむ、着ぐるみの熊を見ている。熊は両手一杯に風船の束を持ち、おどけもせずに仕事をなかば放棄し棒立ちしていた。

私も見ていたら甘味を欲して、ソフトクリーム店の列に並ぶ。このご時世に繁盛していて結構なことだ。アイスをつくってコーンに入れるだけなのだから、たいした手間ではないはずだが、ところがどっこいまったく列が動かない。列から顔を出し列の先を見るも、老夫婦が別段慌てる様子もなくよたよたと客をさばっている。この調子だとまだまだ時間がかかりそうだ。

このまま列に並んでいるか、それとも列を離れ、手軽にコンビニのアイスで妥協するか。悩んでいると目の端で男を捕らえた。目安五メートル離れていても、目に付く長身である。

男は腰まで伸びた長髪を揺らし肩をすぼめて、横断歩道を渡り、駅方面に歩いていく。

私は男を目で追っていき、気付かず列から半身出てしまった。私の背後に並んでいた、防腐剤の臭いを纏う中年女性も、進まない列にやきもきしていたのだろう。半身出た私を見逃さず、一歩前に出た。中年女性の背後に並ぶ、携帯から目を離さない男性はそのまま中年女性の背後に並び、いつの間にか私はぼつねん列から除外されてしまった。列に戻ろうにも中年女性がスペースを与えるはずもない。肩をぶつけてみても、まるで動じない。中年女性に睨まれ仕方なしにその場を離れた。

かさばる紙袋をゴミ箱に捨て、素早くストールを首に巻く。

私は男の後を追いかけた。

男の名は知らないが、やけに目立つ風貌で記憶している。男は同大学に通う学生だ。食堂で、廊下で、見かける時は万事一人で、誰それとにこやかに会話をしているところはない。能面に似て、見ようによっては斜に構えて笑っているように見えるし、不機嫌に威圧しているようにも見える。ともかくとっつきにくい印象がある。

どこか居心地が悪そうな、おどおどした表情をしていた。毎日、食堂の一番隅の日の当たらない長いテーブルで素うどんを啜っていた。男の肩越しから垣間見える所在なさげな顔に、再開発前の北口のどぶ板を歩く小学生時の自分を重なってみえた。

男にすぐに追いつく。チノパンに薄いパーカー姿の男は、猫背であるのもかかわらず格好がよい。先程立ち読みしたモデルの気だるそうな雰囲気とよく似ている。ぱんぱんに張った花柄のリュックを背負い、歩幅の広い歩き方で進んでいく。足の短い私は、男の一步を二歩で追いつく。

私は男とは反対に、一人で居ることがない。輪に身を置き、個性を埋没させている。男は大勢の輪の中にいる私を記憶しているか懐疑的だ。

手を伸ばせば触れられる距離である。声を掛けようにも、喉元で言葉が詰まった。

軽薄に声を掛け、男が私の存在を承知していなくても、同大学だと伝えれば無碍に扱うわけにもいかないだろう。そうも考えるが、好き好んで一人である変わり者なら、怪訝な顔して悪態をつくやもしれない。下手をしたら殴られるかも。男がどう対応するか想像できず声を掛けるのを躊躇し、好奇心を腹に押し込め尾行した。

のちに考えれば、声を掛けられなかったのは只の態のいい詭弁でしかならず、私は社交性の欠落した男を見下しており、弱味を掴み一人ほくそ笑んで蜜に浸りたいと考えていたのだ。

その証拠に、私の胸は期待と背徳感で昂揚し、ストールで隠れた口角は下品に釣りあがっていた。

後をつけること数分、一時の熱が冷め始めた頃、男は公園内に入っていった。芝生は綺麗に刈り揃えられている。公園は枯れる前後の芝生でまだらに覆われ、野良犬の背に乗っかっているようだ。公園には遊具があった痕跡があり、川沿いに散歩道があり、広場の中央にはアマチュアオーケストラ団が定期的にフリーコンサートを開いているステージがある。

私は懐古の情に満ちた。まだ保育所に通っている時分に、この公園でヒーローショーが行われ、母に手を引かれ来たことがあった。ヒーローショーの終わり品、ヒーローと写真を撮ってもらえた。

私は意気揚々と順番を待ち、当時憧れのヒーローの横に立つと、ヒーローから強烈な腋臭で鼻の奥が痺れ、ポラロイドに写った私はいえもしれない表情で、手だけはピースをしていた。その日を境に、私は日曜の朝早起きすることがなくなった。苦い記憶である。

平日の昼間だというのに、ステージ前の広場にはけっこうな人がいた。ベンチシートを広げ横になり麦酒を呑んでる青年や、同世代と思われる女性は体育座りで、武器よさらばの文庫をひろげていた。

男はとことこ歩いていき、ステージ上の奥に消えていくのを見てから、私も後に続こうとした時に、ふいに声を掛けられた。

「初めてかい？」

視線を声のしたほうへ向けると、不精髭を生やし、スクエア眼鏡をかけた男が、プラスチック製を木目調に加工したベンチに座り、根明な笑みをよこす。

眼鏡の男は、ブルーノートと名乗った。

本名を伏せたいのならそれでいい。こちらも本名を伏せ、ゲコと名乗った。酒は量を飲めないからだ。咄嗟とはいえ冴えない名である。

「彼の友人じゃないだろうね」

瓶麦酒をラッパ飲みしているブルーノートが指す、彼というのが尾行してきた長身の男であるとわかった。否定すると「だろうね」と眼鏡の奥にある窪んだ目を細め、ももをぼんと叩き、開いていない瓶麦酒をよこす。

ゲコと名乗った直後というのに。

ブルーノートは、根明特有の無邪気な鈍感っぷりを発揮した。

「初めてといたしますと」ぎこちなく麦酒の礼を言い、進められた瓶麦酒をブルーノートに習いラ

ッパ呑みする。

ブルーノートが何を言わんとしているか推し量りかねた。こなれた時間の潰し方からして、何かしらの為に何度も足を運んでいるのは確かだ。

「そうかい、ならそのうちわかるよ」含みをおびた言い方をし、手作りサンドイッチに歯を立てる。

ブルーノートに進められ、これまたサンドイッチを貰った。不恰好なサンドイッチはぶ厚く、大口を開けても入らず指で押し込むようにして喰らう。租借すると閉じた口からはみ出そうになる。むさくるしい男が作ったとは思えぬほどサンドイッチは旨かった。しかし旨いには旨いが、具沢山で何を喰ってるんだか判断し難い。舌先で探ってみようにも、口の隅々まで詰まったサンドイッチが災いして、舌が潤滑に動かない。

「どうだうちの連れが作ったサンドイッチは、旨いだろう」

自慢げにブルーノートが言う。口が聞けない私は膨れた頬のまま親指を立て、頷いてみせる。

不恰好のわりに美味しいと飲み込んでから言おうとしていたので、早合点せずに済んだ。

ブルーノートは瓶麦酒を飲み干すと空いた瓶をビニール袋に包む。「さあ、もうそろそろだ。せっかくだから前に行こう」

私を急いでサンドイッチを麦酒で流し込み、急かすブルーノートに背を押されステージ前に陣取り、芝生に腰を下ろした。尻がじんわり芝生の水気で湿る。まばらに散っていた人がめいめいに集まり、適当な所で腰を下ろしていく。

文庫を広げていたヘミング女氏も私の近くに移動してきて、膨らんだトートバッグから一眼レフカメラを取り出す。人影のないステージ上をファインダー越しに見てにやりと口角を上げた。上気した横顔が卑猥である。

周囲を見回す。集まってきた人達同士、接点がありそうもない。若人、スーツ姿の人、風体の怪しげな金髪角刈りの年の頃は四十だろう男までいる。千差万別でまとまりがない。

ブルーノートは眼鏡のレンズを拭き、得意気になり煙草に火をつけた。

「なっ急いで正解だったろう。いやー今回はいい位置を取れた。前は狭いバーだったから遅れを取ったのを挽回できずに後方に追いやられちまって、今度は前で見ると思ってたんだ。君は幸運だよ。朝の占いどうだった。俺はまあまあな五位だったよ」

「記憶してないですね」頭を捻る。目脂がこびりつき、ぼやけた視界でテレビ画面を捕らえていたはずだが、まるで思い出せない。

ブルーノートから煙草を一本勧められ断ったくらいに、拍手が聞こえステージ上に意識を戻す。

ステージ上には禪一枚で全身の肌を白塗りにした追ってきた男が、ステージ中央まで歩いてくると、筒状に丸めていた半紙を広げ、指に墨汁を付け一気に書き上げる。

「こりゃ、一体」首を傾げ呟くと、すかさずブルーノートが口元に人差し指を立てる。

半紙を掲げ、男は荒々しく書かれた書体を絶叫する。

「無縁一仏一三味線一供養一」

初めて男の声を聞いた。凡庸でみっともないくらいに剥き出し声色だった。

盛大に拍手が捲き起こった。方々から「よっトカチ」「トカチー」と掛け声が飛び交う。皆、期待で高揚としている。先程、私が卑猥な目で見ていたヘミング女史が黙々とシャッターをトカチに向け、押す。押す。押す。ヘミング女史の爪が白くなるほど強くシャッターを押していた。

芝生を縫うように興が染み渡っていく。小太りの男が立ち上がり肉まんのような拳を突上げた、グリースで艶やかに固まった髪が乱れる。

私は得体の知れない熱狂に気圧されかけていた。

トカチ。そうか男はトカチというのか。

私は刹那に、トカチの身体が発する猛々しさに見惚れた。男色の気はないが、壮美であった。足は細いながらも筋肉が隆起し血統のいい競走馬の足を想起させた。足の筋肉と上半身に纏う筋肉が異質で、上半身はしなやかに躍動する野生動物に酷似している。巨木の下半身に柳の上半身。隙間なく塗られた白粉で表情が消え、それもまた神秘的でもある。

トカチは半紙を手にも一度奥に引っ込み、再度現れた時には半紙の代わりに三味線を手にしていて。どっかと中央に胡坐をかくと、べんがべんが、ばちで弦を叩くように弾く。トカチは目を硬く瞑り、公園内を威圧する音量で経を咆哮する。私の額から狂喜が分泌され、玉になり頬をつたった。

経が言葉のつぶてとなり私ぶつかる。あまりの迫力に胡坐をかいたまま後ろに転げそうになった。

飛び上がったトカチの身体は躍動した。三味線を放り投げ、無縁仏三味線供養と経を絶えず叫び、ステージ上を駆けずり回る。

何ぞや。これは何ぞや。

私はいまだかつて、こんなにも奇天烈で優雅な身体表現を見たことがない。嫌疑の頭を飛び越え衝撃が降ってきた。知識を根こそぎ引っ張り出し、カテゴリーを探すが枠にはまるカテゴリーがなく、コンテンポラリーダンスより先鋭的で情熱に溢れている。トカチの毛穴という毛穴から蒸気が噴出しているようだ。

私が首を捻ると、ブルーノートが顔を近づける。

「理屈で見ようとするな。当てはめようとするな。馬鹿面して呆けて見るんだ」

私はアドバイス通り、涎を拭うのも忘れ呆けに呆けた。時を忘れ。狐目を忘れ。勉学を忘れ。母の腰痛を忘れ。スタンスミスに這い上がった虫を忘れ。乾燥してひび割れた唇も忘れた。

全てが終り、トカチが荷物をまとめ帰ったのも気付かなかった。一人残った公園で、肺にある空気を出し尽すまで息を吐く。

余韻に浸る。瞼を閉じると暗闇の中、トカチが長髪を振り乱し、闇の中を舞っていた。

### 3

女性的な綺麗な肌をしている。視線を落とすと一転男性的なゴツゴツとした指の節が見える。指の腹まで硬そうだ。黒く艶やかな髪が、こけた頬骨を隠している。

目の前に座るトカチは、ステージで舞っていた時とは別人物と疑いたくなるほど、弱々しく、みじめっらしい。

鮮烈に打ちひしがれた日を思い出す。



トカチの身体から立ち上る湯気さえも神々しく感じ、ステージを離れ走り回り、目と鼻の先を走り行くトカチの蒸気を貪り吸った。鼻腔を通り、肺を通る。血管内がバチバチ破裂しそうだった。これは幻術の類であると発狂しそうになり、寸で自尊心を尾を掴む。

トカチの尾行から一月経つ。私はトカチが気になりつつも、エキストラな日々を送っている。相も変わらず友人の輪の中に身を置き、意図的に賑やかしをやっていて。食堂で友人の一人が「あの長髪野郎、また素うどん喰ってんぞ」と嘲笑すれば、一緒になって指を差した。後で一人小便器に用を足している時になり、トカチの服で隠れた均整のとれた体を思い出したりもした。

この一月は葛藤の日々だった。

おもいもよらぬ形でトカチより持たされた感覚の、落としどころが見つからず、妙に苛立ったり躁状態に陥った。一步外に出てしまえば平静を装わねばならない。感情の起伏を曝け出すなんて青春が過ぎるではないか。十代ならまだしも、二十歳を過ぎたら慎むものだ。

この感情は待望していたセンスによる衝撃の雨である。なにを情緒不安定になっているのだろう。私は今まさにずぶぬれになり己の身を抱くようにして、センスに震えているのだ。

しかし私に待望の衝撃をもたらしたトカチは、野暮たく、社交性もない。望まないとはいえ客人に他愛のない話もできなく、お茶一杯出さない。構内では、伏し目がちに長髪を揺らし、肩を壁に擦るようにして廊下を歩いている。

私の想像していた人間像とは大きく異なるではないか。器がでかく、先天性に輝く。屈託のない笑顔で誰からも好かれ、立ち寄った先の店でオマケしてもらったりする。周囲にちやほやされ、対外のことは仕様がねえやと笑って済む。休日なんかは友人達のスケジュールの取り合いで、もう祭りである。しかし孤高のセンスの主というのは往々にして、こういう人なのかもしれん。薄めていくにつれ、ちやほやされるのだろう。

好機が訪れたのは、帰り道腹痛に襲われ体をくの字に曲げコンビニに駆け込んだ。友人達と目的もなく遊びに行く予定であったが、もうそれどころではない。腸が絞られる痛みに悶絶する。友人の興を冷ますのは避けたく何気なしに別れを告げ、じゃれ合う背を見送ってから小綺麗なコンビニのトイレで一人格闘しトイレで唸った。ドラッグストアに立ち寄り、水なしで飲める腹痛薬を購入し飲んでみたものの改善の兆しがみえない。療法を守らず、もう数枚腹におさめ言い聞かす。腹の機嫌を損なわぬよう小股に力を込めポプラ並木の下を歩いていると、トカチの猫背が私を通り過ぎた。

トカチは買い物袋をぶら下げ、ハミングしていた。曲は、くるりのスーパースターである。

途端、腹がぎりぎり軋み、括約筋が悲鳴を上げた。脂汗が額に滲む。尻の肉が痙攣する。周囲を見渡すがトイレを貸してくれそうな店が見当たらない。

通行量の多い歩道で脱糞なぞしてられん。末代までの恥を残してなるものか。仕方がないと意を決し、トカチが横道に入り、うらびれたアパートの門をくぐって行くところで肩を掴んだ。水はけが悪く、昨晚に降った雨で土がぬかるんでいる。門は片方が朽ち、門の役割を果たしていない。

いきなり肩を掴まれたトカチは驚き、私のただごとならぬ形相に再度驚き、怯えていた。

「悪いが、トイレを貸してくれ」辛酸滲むような声がでた。

トカチは頷き、そそくさと部屋の前に行きポケットをまさぐり鍵を出した。ベニヤ板を張り付けただけの頼りないドアが開き、トカチの脇をすりぬけて靴を脱ぎ捨てる。靴が転げ、跳ねた泥が砂壁に飛ぶ。

「入ってすぐ左です」

失礼ではあるが礼も言わずにトイレに駆け込んだ。本日幾度も酷使している尻の穴は、グミ程度の糞くらいでも焼けるように痛む。

首に青筋を立て用を足し終り、便座に腰掛け腕を組む。切羽詰まったとはいえ面識のない家にあがりこんでしまい大糞捻り出し、どんな面して出て行ってよいものか。気恥ずかしさに身をくねらす。

気を揉んでいたら、猛烈な腹痛が不思議と鎮静化した。この際だから面の皮を厚くして、根明の阿呆を装い懐を突いてやろうと思いい経った。

根明はこそこそと出て行かないだろうから横柄に胸を張りトイレから出る。駆け込んだ時には気付かなかったが、物は最小限で整然と片付いていて、伊草の臭いが漂う。トカチは居心地が悪そうに座布団の上に正座していた。私のほうが堂々としていてどっちが住居しているのかわからない。トカチの目を泳がしている様子から、突発的なストレスに苦慮しているようだ。客人が来ることなどそうそうないのだろう。

「すみません、なにぶん急だったもので助かりました。ありがとうございます」

礼を述べたにもかかわらず、視線も合わさずに首だけで返事をされる。まともに人と話せないまで社交性がないとは想像以上だった。

「私のこと御存知ですか」

恐る恐る尋ねると、正座を解き両膝を抱えたトカチが頷く。

「ええ、あの一、大学、ですよ、知ってます、知ってます」

「そうですか、私も無論存じてますとも。その高身長はいやでも目に付きますから」

下品な笑い声を上げてみせる。トカチは愛想笑いもぎこちなく八重歯を覗かせた。私がトカチの向かいに胡坐をかくと、困ったように頭を掻いた。

「こういうことでもない限り話す機会なんてそうあるもんじゃないでしょうから。ちょっと私の暇潰しにお付き合いねがいたいんですがね、よろしいですよ」

頷くんでも、首を振るともとれうる曖昧な態度につけこみ間髪入れずに言う。

「そうですか付き合ってくれますか。いやぁありがたい、ありがたい」

トカチは諦めたのか、弱々しい愛想笑いで答えた。

「はあ、口下手なもんで、暇潰しになるかなあ、面白味のない人間だから、どうだろうなあ」

「平気ですよ。その内、気分も乗ります。そうですね、まずは名でも名乗りましょう、私はウノと言います。あの在任期間が一番短い総理大臣のウノと一緒にウノです」

トカチは丸めた背を伸ばす。

「僕は、トカチって言います。北海道、地方の名と一緒に、トカチ、十回勝つと書きます」

便宜上の挨拶を終えると思いつたようにトカチは立ち上がり、二リットルのお茶とコップを二つ、梅ノ木が彫られたレトロな盆に乗せて持ってきた。とくとくと注ぎ、緑茶の入ったコップ

を出される。沈黙を埋める為、喉を潤し息を吐くと、トカチが引き出しの中から薬を出した。

「僕も、よく、お腹壊すんで、どうぞ、アメリカのですからよく効きます」

トカチの掌に乗った2粒の錠剤はおおぶりで熟したブルーベリーの色をしている。せっかく出せれたのに臆して断れば、開きかけたトカチの心がまた閉ざす危険があり、無理して錠剤を緑茶で流し込んだ。

だてに入ったらしをしているわけではない。口先三寸、こちらの素性を明かさず根掘り葉掘り尋ねる。一方的に問いただしてはいるが、質問時にゆっくり話すなどして威圧感を削ぐことに配慮した。

トカチの語量少なな話方にはいささか苛立ったものの、ささくれ立った腹心は億尾にも出さずにいる。

どうにかトカチの舞踏の話題を向けたいが、トカチは月に一回のチキン南蛮を楽しみにしているだとか与太話をしていた。こちらが尻尾を掴んでいなければ、つまらない人間だと算段をつけているところだ。

部屋を見回し、クローゼットと壁の間に三味線を見つけた。

「ほう、これは三味線ですか。初めて見ましたよ。へえ一珍しい、弾いたりするんですか」

白々しく水を向ける。

「うん。少し、弾ける、上手に弾けないけど、うん」

まじまじと三味線を見るのは初めてだ。確か三味線には猫の皮を使用していると聞く。愛猫の寝顔が脳裏をかすめ、腹の部分を触れないでいる。

「趣味で」

「趣味じゃない」

「趣味じゃないというと、実家が三味線の家元だとか。もしかして、おハイソな出自なの」

「いいや、実家2DKの借家、普通。三味線は独学だから、正しい弾き方とか知らない。あの、僕は、舞踏家なんです」

ようやく尻尾を出した、トカチは無垢な笑顔を浮かべた。その笑顔で、私は内臓をくすぐられる。

「へえーダンスですか」

「ダンスというような洒落たものではありません、情念であり、放射であり、衝動です」

トカチの物腰の貧弱さは変わらないが、瞳孔に火が灯り、饒舌になる。一月前、私は確かにトカチの情念、放射、衝動の波に晒されたのだ。

「一度見てみたいものですな。近々に披露される予定はおありですか」

「予定はある。場所は、三駅、離れた、今更地になっている所です」

「では、今度拝見させてもらいますよ」

トカチは又困ったように眉をへの字にした。強引に約束をこじつけ、茶を飲み干して腰を上げる。

トカチは私を見送ることもせず、文庫をひろげ目を落としたままであった。

トカチは構内では会釈以上の接触はしてこなかった。トカチが私に配慮して関係を隠したいのか、トカチが私との距離をとりたいのかは定かではない。構内で鉢合わせすることは度々あり、トカチは目を伏せ、軽く首をしゃくるほどだった。私にとっては好都合である。万が一、トカチが構内で親しげに話しかけてきようものなら、冷淡に対応し早々に仲を切ろうと算段していたのだ。

お蔭で友人にトカチとの関係を悟られずに済んでいて、食堂では相も変わらず嘲笑を重ねられた。

ある一定以上は踏み込んでこないと悟った私は、安堵しトカチとの親睦を深めようと手土産持参で何度かトカチ宅を訪問し、小一時間程話しては帰った。私はトカチの売るほど持っているセンスの上澄みをすくいに行っていた。トカチとの会話は回を重ねてもまったく弾まないでいる。トカチは私に慣れず、会話にも慣れない。それでものんびりだらりと過ぎゆく時間は苦にならなかった。途中、黙り合うことまで自然であるならと、焦り突拍子もない話で苦笑することも無い。友人と遊び呆けながら徒労を感じている時間が阿呆らしく感じるのだった。

まごうことなきセンスの持ち主、トカチのトラックバックで私は恩恵を受けつつある。

トカチは映画を見るとパンフレッドを必ず購入し、几帳面にも公開順に収納してあった。それも同日公開ならタイトルのあいうえお順にまでする徹底振りである。

レンタルで借りた映画は、大学ノートに細かい字でびっしり内容と感想を記してあった。私はノートの要所を記憶し、念の為レンタルで借り、翌日友人にしたり顔で講釈をのたまう。効果はてきめんで、次第に友人の対応も変貌してきた。

ベッドに横になりうたた寝をしていると携帯が鳴り、出たところ友人がレンタル店に居るといふ。用件を聞くと、暇を持て余し映画を借りに来たはいいが何を借りていいものか、棚の前で悩み、私の推薦を聞きにわざわざ電話してきたのだという。私の小さな自尊心はそれだけで十分満たされた。

トカチは映画だけにとどまらず趣味は多岐にわたり、ノートに記してある。音楽であればクラシック、ロック、ジャズ、ジャズの中でもジャンクジャズを好み、ページを割いて記してあった。落語はCD、DVDは無論、特に関連本が豊富で重要だと思われる箇所には蛍光マーカーで線引きまでしてある。私がトカチが線引きを読んでもちんぷんかんぷんであったが、のたまう相手も落語の知識は皆無に等しいだろうから、多少の誤解があっても構わないだろう。小劇団のパンフレッドまであり、数冊目を通して見たものあらすじだけでは全貌が掴めず、のたまうのを諦めた。

次第に私はトカチ宅で読むだけでは限界を感じ、トカチに頼み込みノートを一晩拝借してはコピーし、うちでトカチノートのバックアップ版を保管するようになった。

トカチは大層嫌がった。人に見せる前提で記した物ではなく、あくまで自己の記録であり尺度である。人にまじまじと眺められるのは羞恥ほかならず、私が読むのも快くは思っていない。トカチは薄々、私がノートを使い姑息にほっくりしているのを、程度はどうあれ耳にしていたはずである。トカチが一度でも口外しようものなら、私の取り繕った稚拙な一夜城はたちまち崩壊の一途を辿るだろう。トカチが口外しない理由は明快でトカチは己以外の事柄に興味が高いからだ

私の本棚にはバックアップノートが幅を取るようになっていく。これは私の大学生活を円滑に進めるための命綱になるまでになっていった。

私が始めてトカチの舞踏を見てからようやく次の舞踏の日になった。今になればヘミング女史が夢中になってシャッターを押す気持ちが良いと理解できる。あの刹那を切り取りたい。トカチが舞っていた時間がいとおしく、何度瞼を強く閉じたことか。トカチの舞に飢餓をし、涎を垂らす狂犬病の犬の如く指折り数えて待っていた。こんな思いは久しく、修学旅行前の眠れぬ夜以来である。

席取りを考え、昼食は今回の舞踏会場となる近くの純喫茶で済ますことにした。

電車の乗り継ぎの労が、純喫茶のポークソテーで吹き飛んだ。注文をとりに来た快活な女性が店主のようで厨房も兼務している。店構えがしなびた感じで、キーコーヒーの錆びた看板が風に吹かれ回っていた。ヒッチコックと書かれた看板は色褪せている。店内に入ると、コーヒーをたしなむ爺さんが数人いるだけで流行ってはいないそうだったが、これが旨い。昼時にもかかわらず客が少ないのは何故か。

食事を済ませてもまだ時間が早い。スポーツ新聞を斜め読みしながら生欠伸をしていたら、店主の怒声がちあきなおみの抑揚のある歌声をかき消した。身を硬くしたのは私だけで、爺さん達は虚ろな目で何杯目かのコーヒーを啜る。

「この、ごく潰しが。また舞台見に行くのか」

「舞台じゃないって」

鍋を振り振り鍛えた太腕で首を締め上げられているのは、一月前不恰好だが旨いサンドイッチを頂戴したブルーノートだった。

ブルーノートは呻きながらヘッドロックされ、ずれた眼鏡を直すと私と視線がぶつかる。不敵に口角をくいと吊り、私に手をあげてみせた。私が、絞り上げられるブルーノートに会釈すると、我に返った店主が腕をほどく。強く締め上げられたので眼鏡のブリッジが曲がっている。開放されたブルーノートは首を擦りつつ私の席の椅子を引き腰掛けた。

「どうしたんだい」曲がったブリッジを直しながら言う。

「トカチを見にきまして、早くきすぎてしまったので腹ごしらえに」

「癖になったんだね」

ブルーノートが私に向けたいたずらっぽい笑みは、旧友に再会した時に向ける親しみがこもった笑みだった。

「サンドイッチ、それともトカチ」

「両方ですかね」

私は打算を差し引いた話をすると、男は私のお冷で喉を潤しながら聞いた。

「ほー同じ大学だったのか、そりゃ奇遇だね」

ブルーノートは乾燥した返答。

察した私は饒舌になったのを後悔した。ブルーノートは舞踏家のトカチに興味があり、一大学生のトカチの評判などは微塵も興味がないばかりか、膨張したトカチの神秘性を害する余計な情

報でしかない。

話が途絶えると、ブルーノートはやおら席を立つ。

「急ごう。今日は前ほどキャパが広くないからポジションがなくなるぞ」

店主の方に目をやると、店主は諦めたように厨房で鍋を振っている。まだ文句がくすぶっているのが所作に出ている。この店が流行らない原因はブルーノートの放蕩っぷりだろうと予想できた。

純喫茶を出て十字路を右折し、木材店を左折する。釣具屋を通過したあたりから住宅街になっていき、男が足を止めたのは更地だった。古びた所有地の看板が刺さり、雑草も茂り、ぽつんと蛇口がある。隅には誰かが、気を利かして拾い集めたであろう空き缶の山と簡易テントが建っていた。

「この土地を持ってる人がトカチを鼻根にしているね、家を建てる前の厄払いをトカチの舞踏にしてもらおうってことらしいんだ」

「それはまたアバンギャルドな人ですね」

「ほらあそこ、風体からしてもアバンギャルドだろ」

白髪交じりでべっ甲の眼鏡、ヒョウ柄のベストを羽織り、立派な顎鬚を揺らす。時折、金歯を覗かせ一人だけパイプ椅子に座っていた。あの人なら神主よりもトカチを選ぶのも頷ける。

更地には人はまばらだ。いい位置を探すも、トカチがどこを舞台と見立てるのか判断できない。私もブルーノートも困ったが、ブルーノートが妙案浮かんだ模様でパイプ椅子に座る派手な爺さんから少し離れた所で、尻ポケットから折りたたまれたキャンプシートを広げる。

「よく考えたらあの爺さんが土地を貸してるんだ、一番近い場所で見るのが道理だろう。なら、じいさんの近くに座っとけばおのずと、な」

私は得心した。

十分も経つと次第に人が集まり、何も知らない近所の住人達も好奇心で集まってきた。

常連が垂れ流す淀んだ興と、何も知らずに来た通りすがりの軽薄な期待が渦巻く。

遅れてヘミング女史が一眼レフを首から下げ、走ってきた。寝癖の髪もそのままに、以前より化粧っ気がない。パーカー姿で長いマフラーを口まで巻いていた。マフラーの隙間から荒い息が漏れる。ヘミング女史は遅したと焦り、泣きそうな顔で周囲を見回した。

ブルーノートが手招きするとヘミング女史は気付き、キツツキ模写をしつつ、へこへこして近寄ってくる。ブルーノートと面識があるのかとおもったが、互いにトカチの舞踏時に見かける位の面識だった。

ヘミング女史は誰も責めてはいないのに、白い息を吐き、胃の悪い臭いをさせながら言い訳をする。

「昨晚、深酒し過ぎまして、まあ深酒は毎晩なんですがちゃんぽんしたのがまずかったんでしょ。意識が明瞭になったのが昼過ぎになってしまってもうてんやわんや」

なんとも、おっさんくさい言葉回しをする。歯を磨いてないのか口臭までおっさんくさい。

「いつ頃来ましたか」

ブルーノートが答える。

「ああ小一時間前かな。もう予定時間は過ぎてるんだけど、まだ来ないんだ。いつものことながら焦らしてくれるよ」

ヘミング女史もブルーノートに同調し身悶える。いやんいやんと両肩を八の字に振った。

私には御馴染みではないから、まだかと一人苛立っていたが、そういうことなら気長に待つより他無い。

私達が仮名を名乗ると、ヘミング女史は自分も仮名を名乗ろうとしたが、すっと出てこず弱り果てた。私が「ヘミングというのはいかがでしょう」と助け舟をだすと、ヘミング女史も乗ってきた。トカチがくる間、ヘミング女史が持参する写真を拝見させてもらった。百枚入るアルバムが全て埋まっている。これでもまだ一部なのだそうだ。

彼女の部屋を想像してみる。おっさんくさい言動からして、ぬいぐるみだらけのピンク調ではないだろう。勝手ながら玉暖簾が掛けられ、こたつがある和室を連想した。こたつの上には空いた酒瓶が群れを作る和室の部屋には、壁に半裸の男の写真が画鋏で何枚も貼り付けてある。身震いする風景だ。

トカチが現れる。初見の人達は何が始まるやも知らず、ましてや覇気のない若人に気を払うものはいなかった。常連の満悦した眼色を縫うようにして歩き、ひたと足を止める。モーゼの十戒さながらトカチの周りの人が間を開けて、初見の人まで常連に沿ってどく。

トカチが舞台に選んだ場所は、こちらの目論見通り、爺さんが最前列である。私はブルーノートと見合わせほくほくした。

爺さんがトカチに接近し握手を求めるも、トカチは差し出された角質が固まった手には触れようとはしない。爺さんは目的のなくなった手をヒョウ柄のベストのポケットに収め、ばつの悪さを笑いで誤魔化した。

挨拶もそこそこに、トカチは簡易テントに身を隠す。身支度を済ませ、寒空の下、赤い禪一枚で簡易テントから出てきた。手には半紙。肌は白塗りで、父に肩車をされた子供がその異様さに泣き出してしまった。子供のキーキーやかましい黄色い泣き声は、その他の子供の不安をあおり、連鎖した。

阿鼻叫喚。

親達は慌てふためき、私は耳を塞いだ。常連組みは子供が眼中にない。突如、私の後方で泣き声を陵駕する野太い狂喜の声が響く。

「トッカチー」小太りの男が立ち、半裸で着ていたダウンを振り回している。弛んだ肉がうっすら汗ばみ、陽の光に輝く。

トカチが半紙を広げる。

「不貞一酔いどれ一地獄一巡りー」

泣く子も黙るとはまさにこのこと、子供は泣くのを止め、目は一応に充血し口震わした。

トカチは半紙を両手でカ一杯丸めるとその場に捨てる。白く細い指が、獣の凄みに変わり、一滴の涎が垂れ、地面に落ちる。色褪せたラジカセの再生ボタンを押すと、音質の悪い和太鼓の音が鳴った。

てんつくてんてん、かんかん、てんつく。

初見の親子連れは渦巻く異様さに恐れをなし、子供の目を隠し足早に帰っていく。その中には骨のある子もいて、膝を抱えトカチを注視している。

観客はたおらかな溜息をつき、桃色に頬を染めて、トカチの舞踏に見惚れていた。

トカチの食いしばった歯の隙間から白い息が吐かれる。やわらかに跳び、体が波打つ。長髪が一拍遅れてトカチの後を続く。

ヘミング女史が隣で鼻息荒くカメラで撮るのも、気が散らずにいた。

なるほど、一度目とは異なる感覚である。初見ではただただ興奮に打ちひしがれていたが、二度目では興奮が一定に落ち着き、心地よい。癖になる。

爺さん婆さんが温泉に肩まで浸かり、弛緩しきった面で風景を傍観するように、皆が胡乱にとろけていた。

まどろむ熱狂を遮ったのは、若い警察官と中年の警察官だった。若い警察官がカセットテープを止めるのに手ごたえ、見かねた中年の警察官が音を止める。

「これは、なんの集会ですか」

訝しげに中年警察官は、トカチに尋ねた。主催者と見通してのことだったが、トカチは舞踏を邪魔され立腹し不機嫌に唇を噛み、黙ったままで用件を得ない。警察官とトカチに割って入った、主催者の爺さんが息巻き警察に突っかかり、なにやら揉めている。

私は、これで解散かなと高揚した気が萎えてしまい、帰り支度をしようとしたところ、周囲の不穏な雰囲気気付いた。常連達の目がすわっている。

考えてみれば、焦らされフラストレーションが最高潮になり、ようやく始まった舞踏が中断されたのだ、憤怒するのも無理はない。ましてやここに集まったのは、トカチ依存症に近い症状の持ち主達だ。

常連達はこの場から離れる気配はさらさらなく、不満を独語する者もいる。彼らが暴徒と化せば、二人の警察官が対応するには無理だろう。

警察官が、取り乱し反論する爺さんに手を焼いてる間に、客席から奇声が上がった。若い警察官が、奇声を発した坊主頭の男をなだめるも、男の興奮は収まらず、若い警察官の頭に齧りついていた。

膨らむ不穏な雰囲気に、私は怖気づいた。この場から離れたほうがよさそうだ、警鐘が鳴る。

ブルーノートが我慢ならないと、警察官ににじり寄り、胸座を掴み中年警察官に食って掛かる。中年警察官は、ブルーノートが飛ばす唾に顔を背けた。

逮捕されてはかなわない。私は荷物を抱え、逃げるようにして場を離れた。

5

「しかし上手く燃えないもんだ」

いっと缶にトカチノートを破いては入れた。火の粉に気をめぐらしつつ、途中、炭の塊を棒で突き粉々にする。全て灰にするのには二時間もかかり、当初の三十分程だろうとの甘い目論見は外れた。焚き火などしたことがないから、火をつけるのに難儀した。型にはまったおっさんから「最近の若人は」と、嘆かれそうである。私は道標を炭にした。もう必要としないと決めたのだ。



七ヶ月前、家に逃げ帰りベッドで四股を投げ出していると、携帯が鳴った。友人は興奮した様子である「聞いたか、毎日素うどん食ってた長髪の男、俺達の知らないところでカルトグループのリーダーしてたんだってよ。クックック。分けの分からない踊りしてたんだと。クックック。で、集会途中に近隣住人から苦情を受けた警察と悶着起こして、逮捕されたんだってよ。クックック」

私は知らなかったように調子を合わせた。顔を引きつらせながらも、トカチをカルト野郎と心無くなじった。

大学に行くと、話題はトカチで持ちきりである。尾ひれ背びれが付き、トカチの偶像が出来上がり、おどろおどろしい男に成り果てていた。弁明できるのは私だけだが、私は弁明はしない。偶像作りに参加しなかったのがせめてもの償いである。

詳細を聞きにトカチ宅を訪れるも、留守でありメモを扉に挟んで帰ったが、数日経ってもメモはそのままだった。しばらくして又訪れたら、メモはなく家はものけの空である。

ブルーノートの純喫茶に寄った。丸窓から店内を覗くと、以前のように爺さん数人が湯気の立つコーヒーを啜り、店主が威勢良く鍋を振っていた。ブルーノートは汗をぬぐい、ひたすら皿を洗っている。私が来店するとブルーノートは喜んでくれた。泡だらけの手を振り、皿洗いを中断し奥の席に案内する。汚れていないエプロンをほどき、放り投げた。店主は私にアイスコーヒーを出し、帰りしなブルーノートの頭を引叩いた。ブルーノートは表情を変えず、煙草をくゆらす。

私は引け目を感じていたので、ブルーノートの暢気さに気が緩ませた。

「ご無沙汰してます」

「半年振だね。俺が捕まって以来だ」

トカチが捕まったのは耳にしていたが、ブルーノートも捕まっていたのは知らなかった。

「留置所に三日お世話になっただけだけど」

ブルーノートが懐かしそうに呟くと、背もたれを蹴られ、がくっと、首をいわせた。

「馬鹿ってんじゃないってんだ。不惑の四十になった男が警察の厄介になりやがって。何回馬鹿って言っても言い足りないよ」

店主は鬱憤が溜まっていたのだろう、早口でまくしたてるが、ブルーノートはどこ吹く風で悪気もなく笑っていた。

さぞ、店主は気苦労が絶えないであろう、心中御察しする。

ブルーノートは嫌な素振りもみせず詳細を語ってくれた。武勇伝を語っているが如く舞台役者ヨロシク雄弁に話す。主催者のお爺さんが興奮しすぎて泡を吹いて倒れた事。ブルーノートが勢いあまって、中年の警察官の脛を蹴ってしまい公務執行妨害で腕を捻り上げられ、泣きべそをかいた事。泣いた子供の親が通報した事。警察はオカルト集団との通報を受けていた事。トカチは物言わずパトカーに乗せられた事。

純喫茶を出た。最後にヘミング女史がよく店に顔を出すと言っていたので、私もちょくちょく顔を出そうと思っている。下心だ。それ以外ない。

私が持ち合わせていない、センスを持ちたかった。子供じみた、ない物ねだりである。僅かな

時間だが、トカチのセンスの欠片でいい思いもできた。トカチがいなくなった今、これからはトカチノートで得た知識を、ばら撒いた罰として、私名義のセンスから軟着陸するのに難渋することだろう。又面白みのない無味乾燥の人間に戻るのだ。終わりのみえない軟着陸の過程に早くも面倒になり辟易してしまっている。

センスなんぞはいいものではなかったなあ。

センスは突き抜けた長所であると考えていたが、私の考えは的外れもいいとこで、センスは底の抜けた欠落であった。

井戸の中を覗き込み水面に写る波状に揺れる月のようなものだ。綺麗だからといって井戸に飛び込み、すくうとはいかない。ほの暗く狭い苔の茂った陰気な所に、わざわざ飛び込んだ私は阿呆だ。

周囲だってセンスを持ち合わせていないのを分かっただけが、収穫である。センスがないのを隠そうとして、ことさらセンスセンスと言うのだ。欠落からくる本物のセンスなど誰も欲してはいない。私はこれからセンスセンス言ってやる。

体から炭の臭いがとれない。決して嫌な匂いではない。部屋着に着替え、炭酸を飲みながら菓子をつまむ。携帯が鳴り、出ずにいると切れ、留守電が入っていた。

「おーい風呂かあ。ジャズ好きな子と知り合ってね、興味を持ってもらう為に詳しい振りをしちまって辻褄合わせでジャズを聴いとかねばならんのだ、色情にも骨が折れるのだよ。それはそうとウノ君、ジャズに詳しいと聞ってるぞ。折り返し電話くれ」

私は携帯を開きブルーノートに電話をした。ブルーノートと名乗るくらいだ、無知なはずはないだろう。

了